

海岸林を造る取組みⅡ

～第二次計画の実施～

第一次計画の実施を踏まえ、第二次計画(大正5年～大正13年(1916年～1924年))ではクロマツの苗木を潮風や飛砂からより適切に守るため、様々な改良を行いました。

1 前丘の築設

植栽地を潮風や飛砂から守るためには、海岸線の最前線に高い丘(「前丘」という)をつくるのが有効であることから、大正5年から海岸線に沿って高さ2mの集砂垣を設置しました。砂が積もればその上に集砂垣をつくり足す工法により、大正12年には高さ約6mの前丘をつくることに成功しました。

また、前丘の安定化を図るために、前丘にチガヤやハマゴウ等の海浜植物の種をまいたり、前丘の頂部が幅が狭く不安定であったことから一条垣を二条垣にするなど改良を行いました(写真-1、2)。



一条垣の前丘(写真-1)



二条垣に改良した前丘(写真-2)

2 防風垣等の工夫

海岸線より91m離れた箇所から海岸線に平行に27m間隔の2列の砂防垣を設置し、後列の垣よりさらに91mへだて、2列の砂防垣を設置する方法を繰り返して、安定した砂地まで設置しました。また、砂防垣内の飛砂防止を目的に、砂防垣間には東西南北の方向に、45mの間隔に碁盤目状の小砂防垣を設置しました。(図-1、写真-3)。

なお、小防風垣について、防風効果を調査した結果、45m間隔では広いことから、その間にさらに小防風垣を設置するなどより細やかに対応することとしました。

このような工夫を重ねながら植え付けを続け、大正13年には、国有林全体の植え付けを完了しました。この間、砂防垣等を146km作設し、クロマツを中心にネム、ニセアカシアなど500万本を植え付けました(新植:290万本、補植:210万本)。

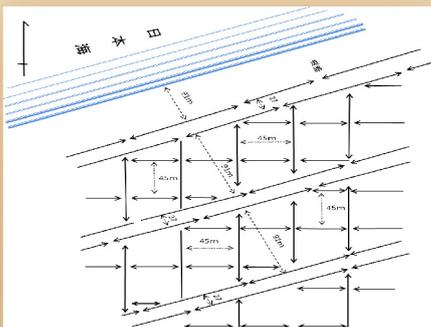


図-1 第二次計画砂防垣の配置図

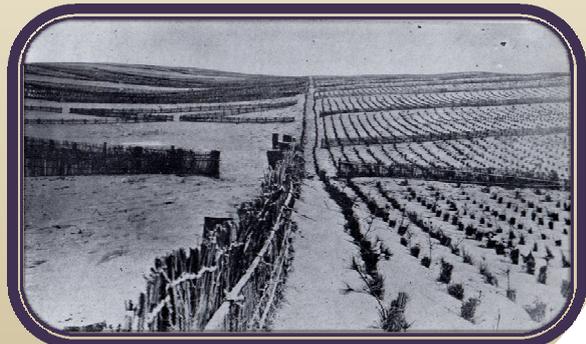


写真-3 立業法による植栽状況

○クロマツの苗が枯れる原因

クロマツは、塩水をあびても枯れない非常に強い木です。しかし、冬の強風により巻き上げられた砂が葉に当たり傷つき、そこに風に乗った霧状の塩水が当たることにより塩害(葉の枯れ)が発生し、被害のひどいものは枯れてしまいます。このため、飛砂を防ぐことが重要です。